



長岡信明 NOBUAKI NAGAOKA

1952年生まれ。ギターの録音物を通して、ギターの発展を研究することを目標に、世界中のギター録音の収集および体系的データベース作りを目指す。

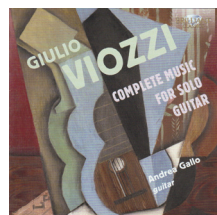


Gnattali, Mignone: Complete Studies for Guitar モナルダ

Gnattali, Mignone: Complete Studies for Guitar
Andrea Monarda (G)
Brilliant Classics 96410
オランダ (欧州) 盤

●ブラジルで活躍した2人の作曲家、ニャタリとミニョーネはギターのプロフェッショナルではなかったが、興味深いギター作品を残した。この2枚組のアルバムは特に練習曲（ニャタリの作品は範疇から外れる作品もあるが）を中心に纏められている。背景にはヴィラ＝ロボスの《12の練習曲》の例とサントスやバルボサ＝リマなどのギタリストからの要求などがある。ミニョーネにはバルボサ＝リマが技術的な示唆も含め関わっている。また完成時にはバルボサ＝リマ自身がLP録音を残している。ブラジルの民族音楽とポピュラー風の音楽なども取り込まれ結構モダンな練習曲ながら、あまり演奏される機会がないのは残念なところである。ニャタリの〈～演奏会用練習曲集〉はもともと独立した作品、ニャタリ自身が一つに纏めた。両作曲家ともギター（ヴィオロン）で民族音楽とクラシックを結びつけた作品を残しているが、これら練習曲集にはそれがシンプルに出ている。

[10の練習曲、3つの演奏会用練習曲、小組曲、ブラジリアーナ13番（ニャタリ）、12の練習曲（ミニョーネ）]



G. Viozzi: Complete Music for Solo Guitar ガロ

G. Viozzi: Complete Music for Solo Guitar
Andrea Gallo (G)
Brilliant Classics 96506
オランダ (欧州) 盤

●トリエステ出身のヴィオジジはギターの演奏は行なわなかったが、このアルバムに収録されたような、個性あふれながら正統的なギター作品を残した。ミラノ出身のガロが、特にトリエステのカルロ・シュミドル劇場博物館に残されているヴィオジジの手稿譜をもとに、出版譜の校正を行ないつつこれらの作品を録音している。《ソナタ》は3楽章構成でちょっとモダンな和声とリズム感は当時のイタリア風を感じさせる作品。ガロがヴィオジジの作品で特に味を持った〈ファンタジア〉は前半のミステリアスな雰囲気と後半のリズミックな対比が面白い。ブラジル風（サンバ）などのポピュラー音楽の影響も感じられる。《変化の組曲》は3楽章ながら最終章の変奏曲部分がほとんどを占める。前奏部分を持った変奏曲という所か。最後の〈半音階的練習曲〉にヴィオジジのギター音楽のエッセンスが詰まっていると思われる。旋律、リズム、和声それぞれが絶妙のバランスで作品を構成している。

[ギターのためのソナタ、物語、ファンタジア、道筋、変化の組曲、半音階的練習曲（ヴィオジジ）]



Ex Aequo ミンダー

Ex Aequo
Duo Diversitas (Marisa Minder (G), Evgeniya Spalinger (Fl))
NAXOS 8.551454
ドイツ (欧州) 盤

●バロックから現代までの作品をギターとフルートで演奏したアルバム、ハウク以外はすべて編曲作品である（ロッシーニ、チャイコフスキー、クライスラーはこのデュオによる編曲）。スイス出身のミンダーはハーグ（ドゥキッチ）、バーゼル（マルケス、シュミット）などで学び、バーゼルでシュパリンガー（ロシア）と知り合ったことでデュオを組み始めた。国際コンクールでの優勝歴もありこのデュオに献呈された作品も結構あるようだ。チーム名（多様性の意）の通り幅広く多様性に富んだレパートリーを持っている。バッハは編曲者の好みもあるのかギターが活躍しており、フルートとの好共演（競演）になっている。クライスラーはちょっと珍しいがシュパリンガーのフルートは作品の持つ軽快な感じを巧く表現している。ミンダーはさすが自国のハウグへの興味から最後にちょっと渋い〈奇想曲〉を選んでる。3楽章の組曲風構成ではあるがハウグらしいモダンさに満ちている。

[ソナタ・ト短調 BWV1020（バッハ～ホプシュトック）、二重奏曲ト長調 KV423（モーツァルト～フィスク）、ソナタ・ニ長調 D384 Op.137/1（シュベルト～ベリストレム）、タランテラ（ロッシーニ～リスト）、松雪草、舟歌～四季より（チャイコフスキー）、美しきロスマリナ（クライスラー）、フルートとギターのための奇想曲（ハウク）]



G.Ph. Telemann: Chamber Music for Bassoon and Guitar マルクス

G.Ph. Telemann: Chamber Music for Bassoon and Guitar
Daniel Valentin Marx (G), Rainer Seidel (Bassoon)
NAXOS 8.551433 ドイツ (欧州) 盤

●ちょっと珍しいバスーン（ファゴット）とギターの組み合わせでテレマンの作品を収録したアルバム。2曲の〈ファンタジア〉はTWV番号からもわかる通りソロ作品であり、それぞれヴィオラ・ダ・ガンバから第2番はギター、第12番はバスーン・ソロに編曲されている。特に第2番はギターの特性を活かして多声的な表現が無理なく使われており、ドイツ・バロック期のレパートリー拡充の好例になるかもしれない（最近テレマン作品のギター編曲が散見される。この曲は演奏者のマルクスによる）。バスーンの魅力はその低音の音色のもつ魅力であろうか。ギターの音域をカバーしてしまう音域の広さであるが、この音色（管と弦）の差異が案外違和感なく混じりあっている。特に短調の作品ではその哀愁感に最も適した組み合わせかも知れない。ザイデルの歯切れのよいバスーン演奏は聴きものであり、急なパッセージも軽やかにこなしているが、マルクスの伴奏とよく合っている。

[ソナタ・ヘ短調 TWV41:f1、ファンタジア第2番 TWV40:27、ソナチネ・ハ短調 TWV41:c2、イ短調 TWV41:a4、ファンタジア第12番 TWV40:37、ソナタ・変ホ長調 TWV41:EsA4（テレマン）]